

2026年度 東京大学電気系同窓会イベント | 2026年10月17日

駒場の英語教育、 AI時代の外国語教育

トム・ガリー

東京大学 名誉教授

東京大学 グローバル教育センター 特任教授

東京都市大学 教育開発機構 特任教授

自己紹介

1957年 ● 米国生まれ

1983年 ● 来日

1986～2005年 ● 辞書編纂者・翻訳者（日→英）

2005～2023年 ● 総合文化研究科・教養学部で英語教育・言語教育研究などに従事
— 2008年に設立された理系1年生向けの必修科目 **Active Learning of English for Science Students (ALESS)** の開発・運営

2023年～ ● 東大本部の英文発信を支援しながら、
生成AIと教育・研究について発言

日本の英語教育を取り巻く状況

小学校から大学まで、
ほぼ全員が英語を学ぶ

統一されたカリキュラムが
重視される

英語以外の外国語教育は
重視されない

日本国内では英語を使う
必要性は高くない

英語教育の目的論

実用論

仕事や社会で使う
道具として

教養論

人格形成や
国際理解の手段として

当然論

これまで皆が
学んできたから、
これからも
学ぶべきだ

駒場の英語教育にも、この三つの考え方が見られる

実用論

→ ALESS / ALESA / FLOWと一部の選択科目

教養論

→ 英語一列（「教養英語」）と一部の選択科目

当然論

→ 統一されたカリキュラム

駒場の英語教育の課題

- 1 時間割、進学選択などの制約で、柔軟な外国語教育を提供することは非常に難しい
- 2 前期課程と後期課程の連携も困難
- 3 新入生の英語能力に大きなばらつきがある
- 4 全体として、学生の英語学習へのモチベーションは高くない

AI時代の英語教育

AIツールは学習者の個別ニーズ
や好みに柔軟に対応できる

AI翻訳や通訳の進歩で実用論の
根拠が揺らいでいる

最大のネックは学習者のモチベーション

結論

- 1 AIの進歩で、実用論の説得力が弱まっている
- 2 教養論の根拠は揺らがないが、
それだけでは学習者のモチベーションを維持できない
- 3 **EMIを「当然」のものにするには、
日本人学生が英語力の必要性を実感できる機会が欠かせない**

例：

留学促進

多国籍プロジェクトへの参加

国際学会での発表

海外インターンシップ

外国人研究者との日常的な交流



ご清聴ありがとうございました

トム・ガリー